
light

六花 霞螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

light

【Zマーク】

Z2153Z

【作者名】

六花 霞蜜

【あらすじ】

灯季と由依は幼い頃からいつも一緒に親友だった。その関係が壊れたきっかけは、由依に届いた友達からのメールで……

眩しい光を見ていたかつた。光の傍にありたかつた。ただ、それだけのことが、難しかつた。

離れていく光を追いかけて、追いかけて。疲れ果てて倒れ込んだ。動けなくなつて、その光がいつか自分を振り返つてくれることを望んだ。

追いかけることが叶わないから、いつまでも、待つていようと思つた。

「おはよっ、灯李」

平日の朝、出勤途中のサラリーマンによるラッシュとは逆方面の電車のホームには、制服を着た学生が多く目につく。そんな中、ホームの隅で本を読んでいた灯李は、肩を叩かれて顔を上げた。

そこには、灯李と同じ高校のセーラー服を着た、幼い頃からよく見知った顔だ。同じ制服とはいっても、おしゃれに興味がないわけではないけれど、怒られることを危惧している灯李のスカート丈は膝よりも少し上なくらい。それに對して、イマドキの女子高生である彼女のスカートは、学校の教師に目を付けられないギリギリの長さまであげられていて、一見したところの印象は随分と違う。

毎朝、十分から二十分はかけて丁寧巻いているといつ、緩くウエーブのかかった長い髪。長い睫毛と、二重なことも相まって、何もしなくともとても大きく見える目。きれいにグロスが塗られた唇の間からは、歯列矯正の金具が見え隠れしていて、本人としてはそれがとても不本意らしく、これまたことある毎に不満を漏らしている。

「あ、おはよ。って由依、どうしたの？ 顔真っ赤だよ」

軽やかにかけられた声とは反対に、由依の息は荒く、顔は赤く上

氣している。夏休みが終わって、文化祭を始めとして、球技大会や修学旅行など、何かと行事が多い一学期が始まつたばかりの今の季節は、まだ残暑が厳しくはあるけれど、真夏のように、何かしていないとしても耐えられない、というほどではなくなっている。

「いや、ちょっと父親に怒鳴られて急いで出てきたからさー」

この季節でも走るとすごい暑いもんだね、と由依はパタパタと手で顔を扇ぎながら、うんざりといった様子で苦笑する。

「お父さんに？ 珍しいね」

丁度やつてきた電車に乗ると、車内の冷えた空氣に、うつすらとかいていた汗が一気に冷やされる。それが心地よいと同時に、一瞬寒気を覚え、灯季は少しだけ体をすくめた。隣では由依が「生き返るー」と自分を仰いでいた手を止めていた。

「やうなの！ いつもはとっくに家出てるかぐーすか寝てるかなのに、何でか今日は起きててさ。でも仕事行かないし。で、朝ご飯にゼリー食べてたら、もつとちゃんと食べろとか怒られたのよ。わけわかんないでしょ。そんなことでいちいち怒るなつての」

「ああ、じつ暑いと食欲も失せるもんね。特に朝とか」

軽く同意をすると、由依は我が意を得たりとばかりに頷く。

「ううう。それに、昨日の夜食べ過ぎちゃったから、今日は食べる量減らさないとね」

「由依は体重なんて気にする必要ないのに」

「あまいっ。そういう氣の緩みが太る原因なんだよっ」

そんな話をしているうちに、電車は幾つかの駅を通り過ぎて、途中の駅で乗ってきた、灯季たちと同じ制服を着た女子が何人か、由依の周りに集まっていた。

明るく、誰とでも簡単に打ち解ける由依は、いつでも自然と人の輪の中心になつている。

それは幼い頃から由依とずっと一緒にいた灯季にとって、誇らしいものだった。

その日のホームルームは、一ヶ月後に迫ってきた文化祭のクラスの出し物を決めることがだった。

「何か希望がある人は言って下さい」

男子のクラス委員である幸坂のやる気のない声に、クラス内の囁き声が大きくなる。近くの席で話し合つもの、離れているのに、声を大きくして仲のいい友達の意見を聞く者。

遊び半分の提案や、真面目すぎてクラスメイトに受け入れてもらえないもの、できるのなら面白そうだけれど実際にはまず不可能だろうと思われるもの、そういう意見が、教室の中を飛び交う。その中から、実際にできそうなものだけを、女子クラス委員の御森が黒板に丁寧な字で書き出す。

「灯季、何かやりたいのある?」

由依が、灯季を振り返って聞いた。教室での灯季の位置は、廊下側から数えて一列目の一番後ろの席。由依は一番廊下側の後ろから一番目、灯季の右斜め前の席だ。

「んー、定番だと喫茶店、お化け屋敷、縁日とかだよね。由依は?」
灯季がそう言つと、教壇からは離れている上に、そんなに大きな声で言つたわけでもないのに、御森はそれを耳聴く聞きつけたのか、黒板に「喫茶店」「お化け屋敷」「縁日」という文字が追加された。「あたし? あたしは……お化け屋敷とかやつてみたいかな。あー、でもなあ、なにがいいかな……?」

言つて、由依は灯季の意見を促す。

「喫茶店とか、大変そうだけど面白そうじゃない?」

灯季が言つと、楽しそうだよね、と由依が同意した。

「ウエイトレスとか、ちょっとやってみたいよね」

どうしようか? とそこで由依が周りにも意見を聞いて、由依と灯季の席の周りが一際賑やかになる。

暫くすると、相談するのにも飽きてきたクラスメイトたちが静かになってきたところで、幸坂が話を進める。

「もう案は出きつたみたいだから、黒板に書いてあるものの中から決めていいですね？」

その時点でも黒板に書かれた案は十個程度。同意する声こそまばらだけれど、クラス委員の一人をはじめとして、クラス全体にそこまでやる気があるわけでもないので、反対の声が上がるわけもない。「じゃあ多数決取ります。とりあえず、一人二回ずつ手を上げて下さい」

そう言つと、友達と相談する間も「え、幸坂は黒板に書かれた提案を右から読み上げていく。

それに教室中から焦つた声と不満が飛ぶ。けれど、幸坂と御森はそんな様子は気にも留めず、パラパラまばらにと拳がつた手を数えている。

「え、ちょっと……。灯季、どうする？　とりあえずは一回だから、お化け屋敷と喫茶店でいいよね？」

由依も焦つた様子で灯季に聞いてきた。

「あ、うん。私はいいよ」

と言つてはいる間に、お化け屋敷と喫茶店が読み上げられて、灯季と由依は焦つて手を挙げた。

「で、多分一回で決めちゃつたりはしないと思うんだけど、実際、どっちにする？」

由依が言つた数秒後に、黒板の一番左に書かれていた提案が読まれたが、誰も手を上げずに、御森が約十個あつた選択肢を、半分以下の四個に減らした。

「さくらはなにやりたいの？」

灯季の左隣にいる美紗が由依に聞いた。さくらといつのは、由依の名字である「桜那」からきたニックネームだ。

ストレートの髪をポニー・テールにしている美紗は、クラスの中心的存在だ。例えるなら、美紗はクラスのリーダー。周りの友達の上に立つて、自分の中の規律を守らせる。対して、同じクラスの中心でも、由依はクラスのアイドル的存在で、由依自身は自分が周りと

同じ位置にいると思つてゐるが、自然と周りが由依に付いていっているのだ。

「え、またあたし？ やっぱお化け屋敷かな でも、喫茶店も楽しそうだしな……」

近くの友達の意見はお化け屋敷と喫茶店で、半々といつた具合だ。

「わたしは、喫茶店やりたいかな……」

灯季がそう言つと、悩んでいた由依も「じゃあ、あたしも喫茶店にする」と、あっさり決めてしまつた。灯季が本当にいいのか聞くと、由依からの返答は「いいのいいの」と軽いものだつた。

どちらにせよ、それによつてほかにも何人か、やっぱり喫茶店をやろうという人が出てきた。

由依の人気がすごいのか、それをやりたかった人が実際に多かつたのかはわからないけれど、結局、文化祭の出し物は、圧倒的多数の票を集めた喫茶店に決まつた。

それと同時に、実行委員も何人か選ばれた。提案者ということで灯季が指名され、それに由依や美紗を含めた四人が加わつた、計五人で喫茶店を仕切ることになつた。

ピロロロロッ。

夜、自分の部屋のベッドの上で漫画を讀んでいると、携帯電話が鳴つた。由依は漫画を脇に置いて、今、携帯に届いたばかりのメールを開いた。

『From 美紗

To 恵里香・雛乃・由依

題名 無題

なんかさー、最近思つんだけどくじつて、いい子ぶつてる感じしない?』

(えつ……?)

いつも一斉送信しているメンバーから、由依の名前を抜かすのを忘れたのだろう。由依はそこに書いてある文章の意味を取りあぐねて、由依はその場に固まつた。すると、またすぐにメールの受信を知らせる為に、立て続けに携帯が鳴る。

『From 雛乃

To 美紗・恵里香・由依

題名 Re:

わかるかも。クラスでも人気あるけど、八方美人って感じする』

『From 恵里香

To 美紗・雛乃・由依

題名 Re:

そうかな？

ああ、そうかもしない！』

急に、息が苦しくなつた。続いて届いたメールを読むのが怖かつたのに、指は誘惑に負けてメールを開く。

『From 美紗

To 恵里香・雛乃・由依

題名 Re:

つてか、今日のHRでもそうだつたけど、さくらつて、自分の意見主張しないよね』

そんなことない！ 叫びそうになつて、思い留まる。返信するべきか、しない方がいいのか。迷つているうちにメールは届き、由依はそれを読むのに夢中になつた。

『From 恵里香

To 美紗・雛乃・由依

題名 Re:

自分の意見言つてもすぐ変えるし、いつも誰かに意見聞いてる

し。「私はみんなの意見を尊重する優等生ですよ」って言いたいのかな？』

心臓が狂つてしまつたのではないかと錯覚するほど、鼓動が速く

なって、その音が頭の中に鳴り響く。

『From 雛乃

To 美紗・恵里香・由依

題名 Re:

意見聞くのは、特にあかりとかね』

『From 恵里香

To 美紗・雛乃・由依

題名 Re:

だねー。あの一人つてあかりがせんじていつてるよう見
えるけど、よく見ると逆じゃない?』

あたしが灯季の下にいる? そんなこと、あるわけない。
それ以前に、自分と灯季の関係をそういうふうに見ている人がい
るということが、信じられなかつた。

『From 美紗

To 恵里香・雛乃・由依

題名 Re:

あかりが影の支配者みたいな? (笑) おとなしい顔して、あかり
もやるねー』

そこまで読んで、由依は携帯を部屋の向こう側に投げつけた。
恐怖とも怒りとも、焦りともつかない感情に混乱して、震える体
を縮めて布団に包まつた。

最近、由依の態度がおかしい。

出し物が決まった翌日から、文化祭の準備が本格的に始まり、灯
季は毎日放課後に残つて作業をしていた。勿論、由依や、ほかの実
行委員も一緒に。

「そしたら、教室の装飾はこんな感じで、机はこういう形で置くん
でいい?」

一緒に机を囲んでいる四人に確認するようにしながら、灯季は由

依の様子を窺う。

「いいんじやない」

そう返してきたのは、頬杖をついて、ぼおっとしている由依で、その返答は、まるで、自分には関係ない、とでも言いたいように聞こえるほど、素っ気ない。或いは、本当は不満だけれど実行委員長がそうしたいって言うなら仕方がない、というようだ。

本当に？ そう、聞き返してしまいそうになるのを堪えて、灯李は話を進めた。由依の様子がおかしくなり始めた頃、あまりに積極的でない返事に、不安になつた灯李が何度も確認していたら、由依が怒つて出て行ってしまったことがあるからだ。

（私、由依に何かしちゃつた……？）

由依の様子がおかしくなつてきたのは、出し物を決めた次の日からだつた。

最初は、話していく反応が鈍かつたり、どこか上の空といった様子だつた。それでも、話かけられればちゃんと返してくれたので、それほど気にしてもいなかつた。

けれど、それは日を追うごとに顕著になつた。行きは寝坊したと言つて、一緒に登校しなくなつたし、帰りは何かと理由をつけては、灯李と一緒に下校するのを避けるようになつた。教室でも、由依が灯李に話を振つてくることはなくなつて、灯李は、なんとなく自分がグループの中で浮いていると感じるようにになつた。

由依を慕つてこそいたけれど、灯李は今まで、自分のことをぐくぐく普通の女の子だと思つていた。けれど、どうだらう。由依と少し距離があいただけで、こんなにも疎外感を感じる。一緒にいることを拒絶されたわけでもないのに、自分が孤独であるかのように思ひ。もしかしたら、自覚していなかつただけで、自分は今まで、思つていたよりも遙かに、人間関係において、由依に依存していただろうか。

誰かに相談したいと思つても、悩んでいるのは、いつもなら灯李の相談に乗ってくれる由依のことだ。それなのに由依に尋ねること

なんて、できるはずがない。そもそも、灯季と距離を置いてしまっている由依が、灯季の話を聞いてくれるとも思えなかつた。

由依が、灯季がした何かについて怒つているのなら謝りたい。そう思つても、自分が何をしてかしてしまつたのかがわからないのでは、謝りようがなかつた。

(どうすればいいの……?)

幼い頃からずっと一緒にいた由依と、距離が開いたままになるのは嫌だつた。だからといって、灯季にはその解決策も、どうしてこうなつてしまつたのかも、全く見当がつかなかつた。

ある日の帰り道。由依は灯季を避けるよになつてから、由依は美紗たちと登下校するよになつた。

「さくら、灯季と何があつたの?」

ずっと気になつていたのだろう。全く関係のない話題の途中で、雛乃が唐突に切り出した。その内容に、何かを言おうとしていた恵里香が口を噤んだ。雛乃が由依に尋ねたことは、一緒に帰っている全員が知りたいと思つていたことだつたのだろう。

「……別に。何にもないよ」

灯季の話が出て、由依は急に不機嫌になつた。

「何にもないなら、なんで灯季にあんな態度取るのよ」

「あんな態度つて? あたしはいつも通りだよ」

雛乃のあとに続いた恵里香の言葉が、自分を攻めてくるよに聞こえて、由依はつづけんどんに言い、恵里香を睨んだ。

「いつも通りじゃないでしょ。絶対なんか変だよ。やけに灯季に冷たいし、由を合わそうともしてないでしょ」

「いつも通りつて言つてるでしょ! あたしがいつも通りつて言つてるんだから、いつも通りなの! それとも何? いつも通りじゃ悪いつていうの?」

恵里香の言葉が事実だつたからこそ、由依はムキになつてその事

実を否定した。

由依自身、今の状況に戸惑っていた。別に、灯季が嫌いになつたわけではない。ただ、この間のメールに書いてあつたことに、どう対応すれば良いのか判らなかつた。この三人は、きっとあのメールを由依にも送つてしまつたことに気が付いていないのだろう。自分の知らないところで、美紗や恵里香、雛乃が、ほかの友達が、「優等生のいい子ぶつている」ように見える自分から離れていつてしまふのではないか。そう思うと怖かつたし、自分が灯季に従つてゐるところではないか。八方美人だと思われてゐることに怒りが湧いた。そんなふうに見えると言つた美紗たちに対するのは勿論、そう見える行動をとつていることに、全く気が付かなかつた自分に対しても。

自分の意見を押し通して、灯季に嫌われることが怖かつた。けれど、そのために自分が不本意な認識をされるのは耐えられない。そう思つた結果が、これだつた。灯季に従つてゐると思わせない為に、灯季と距離を置いた。優等生ぶつているわけではないと示す為に、いろんなことに投げやりになつた。自分の意見だつて押し通す。気に入らなければ拒絶する。

それ以外、どうすれば良いか判らなかつた。けれど、由依はそれが良い方法だとも思えなかつた。

とはいゝ、こうなつた原因である三人は、そのことを知らないのだし、本当は恵里香が自分を避難してゐるわけではないことは、由依にも解つていた。それでも、自分の出した答えを否定されたようで、怖くなつたのだ。

「そ、そんなこと言つてないでしょ」

焦つて否定する恵里香を美紗が庇う。

「そうだよ。それじゃ、ハツ当たりみたいだよ」

そんなこと解つてゐる。由依は喉まで出かかつた言葉を必死に飲み込んだ。ここで美紗たちに当たつたところで、何の解決にもならぬい。

「「「めん、そういうば、あたし今日は早く帰んなきや行けないんだ

つた。先行くね」

それでも、このままこの三人と一緒にいると、耐えられなくなり
そうで、由依はそう言って走って三人から離れた。

「さくら、どうしたのかな？」

走り去っていく由依を見て、雛乃が心配そうに咳いた。垂れ目氣味で温厚そうな顔立ちをした雛乃是、性格も温厚で心配性だ。雛乃と同じように、由依の後ろ姿を呆然と眺めていた美紗は、由依の異変の理由がなんとなく見当はついていた。勿論、そのことは誰にも言つていないし、そんな素振りも見せていなかつたが。

「何にもないつて言つてたけど、やっぱり灯李と何か揉めたんじやないの」

言つて、美紗は心の中で「冗談だけどね」と付け足した。

由依の様子がおかしくなつた理由は、恐らく数日前の自分達のメールだろう。いつもの調子で、間違えて由依にもメールを送つてしまっていたことは途中で気付いたが、謝つたり、取り成したりするのは面倒だったので、無視することにしたのだ。

「そつかなあ」

首を傾げつつも、ほかに理由が思い浮かばなかつたのだろう、恵里香は深く考えるのをやめたようだつた。運動好きで屋外を駆け回つてゐるために日に焼けている恵里香は、頭で「こちやこちや考えることが苦手で、性格もさばさばしている。

「そうだよ。灯李が由依の気に入らないことでも言つたんだしょ。

そういうえば、前に灯李が愚痴つてるの聞いたことあるし」

「うそおー?」

後半の言葉は、勿論全くの嘘だつたが、驚きながらも、美紗の言うことを疑う一人ではなかつた。由依がどんな考え方で、灯李を突き放すことにしてたのかはわからない。けれど、本やマンガの中のように、周りの人間や自分達の思い込みから、擦れ違つていく一人がど

んな関係に至るのか、美紗は興味があつた。

「えつと、ほかに今日決めなきやいけないことは……」

戸惑つたように、話し合いを進める声。

その声を、由依はテレビやラジオの音声のような感覚で聞いていた。現実は、今の由依には関係のない、画面の向こう側だった。

灯季は提案者として半ば無理矢理、実行委員長を押し付けられた。自分には無理だと言つていたのに、今のところ、周囲の反応におどおどしながらも、そつなく役目をこなしている。

「 つてすると、教室の装飾は……」

そこで、灯季が困つたようにその場にいる四人を見回す。けれど、そこで灯季に助け舟を出す者はいない。普段なら由依が何か言つていただろうが、今は感情のない目でその様子を眺めているだけだった。

灯季の話は右から左に抜けていくだけで、由依の中では、何の意味も持つことはなかつた。その時の由依の頭の中を閉めていたことは、その日の朝に美紗たちが由依に言つた一言だった。

『昨日は、ごめん……』

恵里香に八つ当たりしてしまつたこと、勝手に一人で帰つてしまつたことを謝ると、恵里香も美紗も雛乃も、「気にしてないから」と快く許してくれた。特に、雛乃などは「私こそ、嫌なこと聞いちゃつて」「めんね」と、逆に謝られてしまい、由依は焦つた。とはいえる、そこまではよかつたのだ。

それに續いて、軽い口調で美紗が言つた言葉が問題だつた。

『どうせ灯季と喧嘩でもしたんでしょ？ ちょっと前に、灯季も愚痴こぼしてたし』

誰の、又は何の、とは言わなかつた。けれど、話の流れからしても、その部分を取り間違えるはずはなかつた。灯季がこぼしていた愚痴というのは、自分のことだ。

灯季の口から聞いたわけではないから、絶対に事実かどうかはわからない。けれど、こんなところで美紗が嘘をつく理由が、由依には思い当たらなかった。

「誰か、いい案ない……かな？」

怯えたようなその言い方が、この時は妙に癪に障った。

だからだろうか。

「灯季が喫茶店やりたって言つたんでしょ。人に聞かないでも、これがいいとかあるんじゃないの？」

どう聞いても、好意的には受け取れない言葉。言つてしまつてから後悔した。嫌味を言うつもりは、なかつた、はずだ。それでも、不思議と少しだけ気分が晴れた。

それに、先に陰口を言つてきたのは向こうの方だ。由依は、そう自分に言い聞かせて、心の中を埋め尽くしそうになつた罪悪感を消そうとした。すると、何故だか無性に泣きたくなつた。勿論、こんなところで泣くわけにはいかなかつたが。

由依の突然の言葉に、一緒に机を囲んでいた四人は、それぞれ驚いた顔をした。灯季は目を見開いて、明らかに傷ついたような顔をしている。由依は今にも泣きそつた灯季を直視できず、慄然としてそっぽを向いた。

「えと、ま、全くないわけじゃないけど、全部は考えられてるわけじゃないっていうか……」

それでも必死に取り繕おうとする灯季に、その目、由依はもう何も言おうとはしなかつた。

「最近、さくらと灯季が一緒にいるとい見ないよね

「喧嘩でもしたんじやないの？」

「あんな仲良かつたのにねー」

「灯季がさくらになんか言つたって聞いたけど……？」

由依が灯季を避けるようになつて十日もすると、クラスではそん

な声が聞こえるようになった。

遠目に二人の様子を窺うクラスメイトを気にする余裕は由依にも灯季にもなかつた。由依はクラスでの自分の位置を確保することに必死になり、灯季はひたすら黙つて自分の殻にこもつていた。

それを良いことに、美紗はさらにあらぬ噂を流して、由依を揺さぶつた。由依が灯季のことを悪く思うように。「昨日、灯季が『由依には呆れた』ってメールしてきたよ」「ね、灯季って暗くない？」

話かけても答えないし。前からあんな感じなわけ?」等など。灯季がそれを否定せず、誰もそれを疑わなかつたおかげで、美紗の法螺話は調子に乗つてますます酷くなつた。「由依最悪だつて。灯季酷くない?」「灯季が『いい加減鬱陶しかつた』だつて、別に言わなくたつていいじゃんね」と。

極自然に美紗が日常会話に混ぜる灯季への非難は、自然とクラスに浸透していった。

灯季は酷い奴。その認識が強まつていき、誰もが灯季から距離を置くようになつた。陰ながら、表立つて、灯季を攻撃する者も出てくるようになつた。

わざわざ灯季に聞こえるように、灯季の悪口を言つ。たまたま足が引っかかったと言つて、灯季の机を引つくり返す。筆箱を落として中身をぶちまける。『最低』『見損なつた、消えちやえ』といったことが書かれた紙切れを、机の中や上に貼付ける。机の上を液体のノリでベタベタにする。その内容は、一日おきにエスカレートしていくつた。

その『噂話』を鵜呑みにしたのは由依も同じだつた。灯季に対して、自分はそれだけのこととしたと思っていたし、なにより嫌われたくなかつた。その想いに捕われた由依は、灯季自身に確かめようともせず、何も考えずに、その噂を受け入れた。心のどこかで罪悪感を感じつつも、灯季を非難する周囲の空氣にも同調した。攻撃の中心ではないものの、言葉で、態度で灯季を非難するようになつた。朝、由依が教室に入ると、まず一人で席に着いている灯季に目が

いく。顔を上げないから、肩にかかる程度の長さで丁寧に切りそろえられた真っ直ぐな髪が、灯季の表情を隠している。ただでさえ小柄な体を、限界まで小さく見せようとすると身を縮め、周りの音など聞こえていないかのように、ずっと本を読んでいた。事実そうなのか、灯季は、チャイムが鳴ったのに読書をやめず、たびたび怒られていた。

しかし、よく見ると、灯季の手元にある本は、休み時間中、一回もページがめくられることはなかつた。読んでいる本も毎日同じで、読んでいる場所はその休み時間ごとに前後している。さつき最初の部分を読んでいるかと思えば、次の休み時間には残り数ページとうところを開いている。その次には同じ本の丁度真ん中辺りを焦点の定まらない目で眺めていた。

動かない、喋らない、何もしない。それしか見ていなければ、死んでいるのではないかと疑つほどに、灯季は無感動に生きているよう見えた。

そこまでわかるほど灯季を見たところで、由依は自分が灯季なんてどうでもいいといいながらも、暇があれば灯季を見ていることに気が付いた。

灯季は可哀そう？ 自業自得？

気が付いた由依は自分自身に問いかけた。灯季がされているのは、もう避けられているとか、そう言うレベルのことではない。灯季が自分の悪口を言つた。そこから始まつた非難は今やただのいじめになつていて。

灯季へのいじめは当然のこと？

どちらにしろ、今の自分がとれる立場は一つしかなかつた。自分が止めなかつた。いじめられている灯季を見て、いい気味だと思つたことも、ないとは言えない。周りに交じつて、灯季の悪口だつて言つた。

なにより、自分が無関係だと言つたといひで、誰もそれを認めてはくれないだろ？

そんな状態が一変したのは、文化祭が一週間後に迫ったころだつた。

席に座つて本を広げる。目で文字を追つても、その内容は全く頭に入つてこない。ただの模様、音の羅列に変換されて、意味がなくなつていた。

それでも、灯李は本を開くことを止めなかつた。顔をあげることが怖かつた。一日中薄暗い教室。クラスの中に充満した、自分を否定する空氣、無言の悪意。それが実態を持たない圧力となつて、灯李を襲つた。水の中にいるのかと思うほど息苦しかつた。顔を上げたら、声を聞いたら、その内容が何だとしても、自分の中の何かが押し潰されてしまいそうで、壊れてしまいそうで、動けなかつた。自分の立場にいるのが由依だつたら。そう考えて首を振る。由依ならこんな立場にされるわけがないのだ。誰とでも打ち解けて、明るく社交的な由依が、誰もに拒絕されるなんてことには。

本の内容が入つてこないから、周りの音を聞こえなくする為に、どうでもいいことを考えようとした。

昨日の夕飯は何だつたつけ？ 今日の夕飯はなんだろうか？ お母さんは今頃何をしているのだろう？

くだらないこと。答えはすぐに見付かつて、自分の周りに張つたバリケードは、簡単に崩れてしまいそうになる。

それなのに、頭の中を占めるのは、由依のことばかりで、何度も同じことばかり考えた。『ホント、灯李つて最低だね。今までなんで一緒にいたんだろうって思つよね』何かの拍子で聞こえた言葉が、頭の中ですつと蘇している。

わたしがいつたい何をしたと言つた。

クラスに流れる事実無根の噂の数々。誰もが疑わずに受け入れた。自分はクラスメイトに、友達の陰口を叩く奴だと思われていたのだろうか。

『灯季つて最低』

最低？ 最低なのはどっち。

掌を返したように自分を非難する周りに、灯季は心の中で悲鳴を上げる。けれど、固く結ばれた口からその悲鳴が漏れることはない。そして、何よりも辛かったのは、由依が自分の傍にいないことだつた。由依さえ一緒であれば、きっとどんな仕打ちにも耐えられるというのに。

何もかもから逃げ出したいとも思つた。朝起きて、学校を休もうかと思つたこともあつた。けれどその度に、もしかしたら昨日までのことは何かの間違いで、今日からは以前と同じ生活が送れるかもしない、なんて言ひ到底あり合えない希望が膨らむ。そして結局、一人で席に着くのだ。

それでも、文化祭の実行委員だけは、しつかりやろうと思つた。出来ないなんて今言つたら、今度はどんな噂が流されるのか、わかつたものではないし、珍しく由依ではなく自分に任せられた役目くらい頼りなくともこなせることを見せたかった。

文化祭を一週間後に控えたその日、放課後の教室には、実行委員の五人だけでなく、クラスメイトのほとんどが小道具や衣装作りのために教室に残つていた。

話し合いはしていたものの、ほぼ灯季が一人で決めたことを話しているだけだつた。当然、灯季以外の四人は何かを聞かれても答えられずに、面倒そうに灯季に振る。それで、明らかに嫌悪を表情に出しながらも、灯季に答えを求める。灯季の言ひことに、面と向かって歯向かつたり、そうでなくとも、細かいところで意趣返しをしてくる人もいた。

「なんかさー、全部灯季が仕切つてるよね。なにあれ。私は一番偉いんですよ。とかいうつもりかな？」

徐に口を開いたのは美紗だつた。

それに、灯季がビクッと震えた。気にしていない風を装つて周りを窺うと、さつきまでよりも声を顰めて話している人が増えた気が

する。

「そうじゃない？ 由依じゃなくって自分が責任者に選ばれたから調子のつてんでしょ」

美紗に続いて言つたのは恵里香だ。由依は無視を決め込んだように、焦点の合わない目で窓の外を眺めていて、離乃が一人の言葉に曖昧に頷いた。

「そ、それは……、美紗たちが話し合つとしなかつたからでしょう……」

灯季が絞り出すように言つと、美紗は涼しい顔で返してきた。

「は、何言つてんの？ うわらはちゃんと話し合つしてたじやん」

「さあ、どうする？」

愉快そうな美紗の目はそう灯季に語っていた。精神的に追いつめられている灯季を嘲笑うように、その唇は笑みの形に歪んでいる。「あんなの、話し合ひじゃない。美紗も、恵里香も、離乃も、由依も適当に返事するだけじゃない」

「灯季の自意識過剰でしょ。ちゃんとやつてたつて。ねえ、由依？」由依は話を聞いていなかつたのか、ハッと美紗を見ると、慌てたようになつて頷いた。

それに、灯季の中で何かが割れる音が聞こえた気がした。美紗は、由依につこりと笑つて、バンッと机を叩いた。

「自分が目立ちたいからつて、うちらを悪者にでもしたいの？」

表情を口口りと変えた美紗が、傷ついたような声で灯季に叫ぶ。机が叩かれた音で美紗に注目していたクラスメイトは、美紗の言葉を聞いて、思い思いの感想を漏らした。「今までさくらといったのも、結局目立ちたいだけだったとか？」「それじゃあ、さくらは今まで利用されてただけってこと？」「うわ、ひつど」

「そ、そんなことつ」

灯季が言い返そつとすると、どじめとばかりに由依が呟いた。

「無理だよ。今このクラスに灯季が何言つたつて、きっと信じてくれない」

その通り。今はただでさえクラスから阻害されている灯季が、何を言おうと周りの反応が良くなるはずはないのだ。むしろ、下手な言い訳をすれば悪くなる。もし、今の自分の立場にいるのが由依だったら。そこまで思つてしまつて、考えるのをやめた。由依と自分が比べられるわけがないのだ。

由依の言葉は、事実なだけに灯季の心に深く突き刺さつた。

「 っ！ それなら、私なら無視して勝手にやつて！」

それだけ声を絞り出して、灯季は教室を飛び出した。

教室から走り去る灯季を見て、心此処に在らずで様子を見ていた由依は、思わず腰を浮かしかけた。けれど、すぐに思い直してその場にどぎました。

どうせ、自分がここで灯季を追いかけたところで、何が変わるといつこともない。

灯季を追いつめたのは美紗だ。けれど、とどめとなつてしまつたのは、由依が何の気なしに呴いた独り言だった。その自分が灯季を追いかけるなんて、どう考へてもおかしいだろう。

自分から灯季を突き放したのに、何を今追いかけて、一体何をしようというのだろう。自分が灯季を傷つけておいて、離れてみたら寂しくなつた？ なんて都合が良い性格をしているんだろう。灯季が自分の愚痴を言つていてムカついた？ そんなの当たり前だ。愚痴なんて誰だつていう。自分だつて、勿論灯季だつて。今更謝つたとしてどうなる。灯季が自分を許してくれるはずがないじゃないか。それにしても、灯季が言つていたように、自分達は何もわかつていないので、その灯季がいなくて大丈夫なのだろうか。

由依の心配をよそに、美紗は満足げな表情だつた。

それでも、多少ごたごたはあつたものの、灯季が出て行つたのが下校時刻に近かつたため、大した問題もなくその日は終わつた。さあ、帰ろう。と立ち上がつたところで、灯季が席に置いていつ

た鞄が由依の目に留まった。

鞄を置いていったのは、後で取りにくるつもりだったのだろうか、それともそんな余裕がなかつたのか。どちらにせよ、もうすぐ完全下校時刻だから、もう教室に戻つてくることはないだろ？

「ん？ さくら、どうかした？」

雛乃に声をかけられ、由依は、「大丈夫」と答えながら、灯季の鞄を持つて帰るべきか悩んでいた。

由依の家と灯季の家は、一人の家の最寄り駅を挟んで、徒歩十分といった距離だ。少し遠回りになるけれど、帰り道に灯季の家に寄り道できない距離ではない。

「さくら、早くしないと先帰っちゃうよ」

恵里香の声で、由依は自分が思つた以上に考え込んでいることに気付いた。教室には、もう恵里香と雛乃しか残つていない。美紗は先に下駄箱でも待つてゐるのだらう。

電気が消された教室は暗く、夏至より冬至に近付いたこの時期、外はどうに暗くなつっていた。

「あ、うん。行く行く」

自分の鞄を持って、灯季の席の横を通り過ぎる。鞄と体で隠すようになにか隠すように灯季の鞄をかすめると、恵里香と雛乃の後についていった。

勢いで教室を飛び出してしまつたものの、灯季に行く所があるのでわかれでもなかつた。

文化祭の準備で遅くなる、と親に言つてしまつて、そのまま帰るというわけにもいかず、灯季は家の近くの公園で時間をつぶしていた。

「あ、鞄置いてきちゃつた」

子供が遊ぶように考えられて作られている「プラン」。当たり前のよつに灯季が座るには低い位置にあるそれに座つて、暇を弄んでいる時にそのことに気が付いた。それまではそんなことを考える余裕

さえなかつた。

かといつて、今からとりに帰る時間もないし、そんなことをするだけの気力もなかつたので、灯季は咳いただけで何をする気配も見せない。

椅子にするには低すぎるブランコに座り、地面に足をついたまま、灯季は膝を曲げては伸ばすを繰り返す。

何も考えずに。

何も考えたくなかつた。

平日の午後、住宅街から少し離れたところにある公園には、遊び回る子供の姿は見えない。それは時間が遅かつたからか、それとも皆家の中での遊びに満足しているからか。

「灯季つ」

少し遠くから聞こえた思わず声に、灯季は地面に向けていた視線をあげた。

公園に入ってきたときはまだ青かつたはずの空は、すっかり暗くなり、数えられるほど星が、消えそうになりながら輝いていた。公園の中の電灯が、ブランコの隣にある滑り台を照らしている。そろそろ帰らなきやいけない時間かな。

思つたより早い時間の流れに、そんなことを考えた。

「……何？ わたしになんか用？」

自分で思つたよりも、ずいぶんとキツい声が出た。彼女を見据えた視線も鋭くなっているのかもしれない。とはいっても、気にすることでもない。どうせ、彼女がそんなことで傷つくわけがないのだから。そう思つたのに、灯季の名前を読んだ彼女は、灯季の声を聞いて、ピタッと足を止めた。その表情は周りが暗くてよく見えない。

「なんか用？」

返事がなかつたので、灯季はもう一度言つた。

彼女は一呼吸して、強ばつた声で返してきた。

「灯季のお母さんが、まだ帰つてこないって心配してたよ。あとこれ、鞄、置いてつたでしょ」

誰もいない夜の公園は、異様なほどに音が通るわりに、何の余韻もなく、無感動に消えていく。

灯季はもうそんなに遅い時間なのかと驚いて、携帯で時間を確認した。せいぜい六時半くらいだろうと思つていたのに、そこに表示されている時間は七時半。成る程、これは心配しているだろうな、と他人事のように思つ。

それから、由依が差し出してくる鞄と、由依を交互に見やる。「今度は何の嫌がらせ？」

皮肉を言う灯季に、由依は無言で、自分が立ち止まつたせいで空いていた、灯季と由依の距離を、今度は歩いて詰めた。

そしてまた、灯季に鞄を突き出す。

それを、灯季は由依の手からひつたぐるよつとに奪つて、自分の足の横に置く。

由依が自分の鞄を持つてきたのには、何か裏があるのだろうか。そう考えるなら、今すぐ鞄の中身を確かめるべきなのかもしけないが、今の灯季は何もする気が起きなかつた。

そして、由依が来る前と同じよつに、無心でブラン口を漕いだ。「いーちつ、にーいつ、さーんつ……」

漕ぎながら小声で数を数えてみる。何も意味はないけれど、気を紛らわせるために。

「十七つ、十八つ

」「…………ごめんね

急に隣から聞こえた声に驚いて、灯季は足を滑らせた。横を見る

と、由依がブラン口に座つて俯いていた。

自分に鞄を渡して、もづ帰つたものだと思つていたのだ。

「何が

思い当たることは沢山あつた。といつても、大雑把に括つてしまえばたつた一つだ。聞かなくてもわかっているようなものなのに、それでもそう言つてしまつたのは、ほかに言つ言葉が思いつかなかつたからだ。そして、由依を無視する氣にもなれなかつたから。

「全部。……ここ二週間くらいのこと」

下手をすれば、風に搔き消されてしまいそうな小さい声。学校で皆の中心になつている由依からは、想像もできない程で。

けれど、灯季はそれには驚かなかつた。意外にすら思わない。今まで十年以上一緒にいて、このように弱気な由依を、灯季はもう何度も見ている。

「怖かったんだ。私のまわりから、誰もいなくなっちゃうんじゃないかって」

今度は何も言つていないので、由依が自分から話しだした。

ポツポツと。自分に言い聞かせるように、一言一言を、噛み締めるように。理由と言ひ名田の言い訳を。

それを、灯季は黙つて聞いていた。思つたことを思つた順に話す由依の告白は、支離滅裂で、理解するのに精一杯で、口を挟む余裕がなかつたというのが大きな原因でもある。

「多分あたし、灯季なら、じゃないな、灯季だけは、ずっと一緒にいてくれると思ってた、ううん、信じてたんだよね」
たとえ、あたしが灯季を突き放したつて。

確かめるように由依が問う。それは灯季に向けたものであつて、それ以上に自分に尋ねている言葉だった。

「気付かないくらい、当たり前で。大切なものは失つて初めて気付くつて、今までバカにしてたのにな」

独り言のようになづかれる言葉。それらは、確実に灯季に向けられている。

「つて、バカじやん、あたし。灯季がずっと一緒にいてくれるなら、あたしの周りに誰もいなくなるはずなんてないのに」
だんだんと泣きそうになりながらも、由依は乾いた笑い声を弱々しくあげる。

それでも、灯季は何も言わずに黙つて由依の話を聞いていた。

「最初、灯季があたしの愚痴言つてたつて聞いて、ムカついた。人のことなんて言えないのに」

灯季は「ブランコ」を一回、強く漕いだ。ザッと、土を蹴る音が通つて消える。

「でも、みんながあたしから離れていかないよ」と、灯季から離れたはずなのに、余計一人になつた気がした」

地面に近くなつたところで、足を放り出していたら、足が土に当たつてブランコが止まる。

「ごめん。灯季、ごめんなさい。だから、あたしのこと嫌いにならないで」

縋り付くような声。

あたしと一緒にいて。

幼い頃から何十回と聞いた台詞。

そして、それを言うのはいつだって由依だった。いつだって灯季は由依を追いかける側なのに。それに対する灯季の答えも、いつだつて決まっていて。

灯季はもう一度「ブランコ」を強く漕いで、勢いよく降りた。急に乗る人がいなくなつたブランコが、カラカラと音をたてて揺れる。その音に由依が顔を上げた。

「明日は、一緒に学校行こうね」

暗くて由依には見えないかもしれないと思いながら、灯季は由依に向かってめいっぱい笑つた。

明るくて、皆に好かれる由依が好きで、誇らしかつた。自分には到底できないうことを、易々とやつてのける由依が羨ましかつた。だから妬ましく思うことだつてあつた。

それなのに、何かあつて離れていくのはいつも由依だった。灯季はいつだって追いかけて、追いつけなくなつて、離れていく由依が戻つてくるのを待つしかない。

けれど、由依を待つことをやめたことは、一度もないのだ。

「ほら、早く帰んなきゃ」

灯季が自分の鞄を持って、由依に手を差し出すと、由依は少し間を置いてからその手を取つた。

灯季が家に着いたのは八時半過ぎで、家に入るなり、心配していた母親に三十分のお説教を食らはめになつた。

その翌日。三週間ぶりに一緒に教室に入ってきた由依と灯季に、クラスはちょっとした騒ぎになつた。

(は？ なんで？)

昨日灯季がクラスを飛び出していつたのを見て、意氣揚々と登校してきた美紗は、その光景に混乱した。

それはほかのクラスメイトも同様で、何があつたのかと遠巻きに話している者や、直接問いただしている者もいる。

「あ、美紗おはよー」

美紗が教室に入ってきたのを見て、由依がひょこひょこと近付いてきた。その後に灯季も付いてくる。

「おはよっ……二人とも、何かあつたの？」

何もないはずがない、と思いながら美紗は聞いた。その様子は完全に数週間前の一人に戻ったようだつた。

「へ？ 別になんにもないけど」

とぼけているのか、それが素なのか、由依は小さく首を傾げた。その後ろでは、美紗に話しかけられた灯季が、ビクッと反応して由依の後ろに隠れる位置に移動した

(少しいじめすぎちゃつた……かな?)

由依という味方が帰ってきたためか、灯季の美紗に対しての反応は、昨日までと比べてずっと臆病になつたように見えた。

「おはよ、灯季」

由依の横から覗き込むようにして灯季に言つと、灯季は逃げ場を求めるように視線を彷徨わせた。

「お、おはよ」

結局、逃げ場があるはずもなく、灯季は固い声で言つた。

それにもしても、灯季がここまで自分を警戒するようになつてしま

つたのは、計算外だつた。美紗は灯李と由依がお互に拒絶したらどうなるのか、純粹に興味があつただけだつたのだ。それが灯李だけを追いつめることになつてしまつたのは、自分が灯李より由依の近くにいたからで、個人的に灯李が嫌いだからということは全く関係なかつた。

むしろ、全体の中心に近い位置にいるのに、基本的に由依しか見ていない灯李を、美紗はどちらかと言えば気に入つてゐると言えた。（さて、どうしたものかな）

特に由依と話すこともなかつたので、美紗がそのまま席に着くと、由依はすぐにはかのクラスメイトに捕まつて、何で灯李と一緒にいるのかと、問いつめられている。

灯李が陰口を言つていたというデマの内容は、灯李と由依を離すという目的で流されたため、ほとんどが由依を非難するものだつた。その相手が人気のある由依だつたからこそ、灯李に対する反感が余計に強くなり、いじめといえるまでに発展した。その動機が由依のためだつたところが多い分、逆に由依が灯李を許せば、ほかの人気が灯李を拒絶する必要がなくなるのも早かつた。

灯李も、自分は陰口を言つてはいない、ということを主張していて、今は誰がそんなデマを流したのか、という話になつてきていた。「あの噂、誰から聞いた？」

教室のここそこでそんな質問が聞こえてきて、美紗は冷や汗をかいた。保健室にでも逃げていようかとも思った。

「別に探さなくていいんじゃない？」

唐突にそんなことを言つた由依に、周りから不満の声が上上がる。

「あ、いや、やるなとは言わないけどさー。灯李が陰口言つてたわけじゃない、つて皆が認識すればいいわけで」

「誰が流したかは、別にわざわざ探さなくても良いんじゃないかな」由依のあとに続いて、灯李が控えめに言つと、犯人探しに精をあげようとしていたクラスメイトの大半が、由依と灯李がそう言つながら、と納得の様子を見せた。

それに、美紗が安堵していると、また由依が美紗に近付いてきた。

「へつ？ な、何？」

「文化祭、頑張ろうね！」

由依に笑顔で言われて、美紗は気圧されるように頷いた。

「てことで早速、灯季に現状を説明してもらおう」

気が付くと、恵里香と雛乃も近くにいた。

由依に肩をつかまれて、ずいっと四人の中心に押し出される。

「えつ、ええつ？」

困ったように由依を振り向いた灯季に、由依が親指を立てる。

灯季はさりげなく一步下がって、五人の輪を作つて、少しだけ嬉しそうに口を開いた。

氣付かなかつた。月のない夜の暗闇の中でも、あたしを照らしてくれる灯があつたことを。忘れていた。

月を見たいと灯から逃げ出して、怖くなつて思い出した。優しく、あたしを照らしてくれる光に。

あたしはまた、灯があることを忘れてしまつかもしない。でも、きつとまた思い出すから、待つてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2153n/>

light

2010年10月10日23時06分発行